

# 保健部だより(ヘルスケアマネジメント) 第8号

～コロナウイルス感染症は後遺症がのこる可能性～

## 【はじめに】

まだまだ、コロナ禍が治まりません。若干の減少が見られる地域があるものの、二桁からまた三桁の感染者数と、一進一退の状況を日本は繰り返しています。残念ながら外国では、さらに感染者が増加している国もあります。巨大な台風もさることながら、コロナウイルス感染の最大の「予防」は、マスクの着用、うがい、手洗い、消毒、体調管理であることは間違いありません。経済活動も大切ですが、健康が一番です。特に寒暖差がある秋は、体を冷やさないような工夫も行ってください。

## 【後遺症「なし」は13%だけ：イタリアのコロナウイルス感染者143名で判明】

新型コロナウイルスに感染して回復した後も、油断はできない。後遺症が何カ月も残る人がいることがわかってきました。

「感染から4カ月たっても微熱や倦怠感が続いている」「嗅覚や味覚が戻らない」などのSNSやYouTubeなどに投稿された動画で、新型コロナウイルスによる肺炎などからいったん回復して退院した後も、さまざまな病状が残り、なかなか復調せずに、困っている体験を紹介する人が、世界中で後を絶ちません。

ローマにあるバチカン・カトリック大学付属病院の医師らは7月、新型コロナウイルスで入院していた元感染者のフォローアップ外来を受診した143名の体調を米医師会雑誌に発表しました。発症の約2カ月後にまったく症状が無くなった人は18名(13%)だけでした。32%は1～2種類の後遺症があり、55%には3種類以上の後遺症があった。44%は、生活の質が下がったと感じています。

後遺症としてもっとも多くの方が挙げたのが疲労感(53%)で、次いで呼吸困難(43%)、関節痛(27%)、胸痛(22%)が多いようです。嗅覚障害や味覚障害が残る人もいます。

中国やフランスなどの医師からも、新型コロナウイルスで中等症以上の重い肺炎になった患者の多くは、肺炎から回復しても肺の機能が低下し、退院後も息苦しさなど呼吸器関係の症状が残ることが報告されています。



写真はエクモを使用している様子

<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=%E6%82%A3%E8%80%85%20%E3%82%A8%E3%82%AF%E3%83%A2#e2bbf72720caa6991fd478d886f59daf0533e25c5b4551b58d64490b611714ba> から写真引用

## 【肺胞が傷つき線維化】

新型コロナウイルスの長期的な影響についてはまだわからないことが多いです。同じ新型コロナウイルスの仲間によって2002～2003年に流行した重症急性呼吸器症候群（SARS）では、発症から半年以上経っても、後遺症に悩まされている人が一定程度いた。

香港大学の医師らがSARS発症から半年後の元感染者110名を調べたところ、3割の人はエックス線検査で肺に異常がみられた。さらに2年後に調べたところ、肺の機能が正常に戻っていない人がまだ2割いた。身体的な後遺症にとどまらず、2割近い人は2年後になっても、うつや心的外傷後ストレス障害（PTSD）といった精神的な後遺症に悩まされています。

こういった後遺症が残るのはなぜだろう。

日本呼吸器学会理事長の横山彰仁・高知大学教授によると、肺の機能が落ちるのは、ウイルスに感染して肺炎が起きた際、免疫細胞がウイルスを攻撃しようとして出すサイトカイン（生理活性物質）が過剰に出て、肺自体も傷つくからだという。

特に、肺で酸素と二酸化炭素のガス交換を担っている「肺胞」が損傷してします。肺胞が、空気を含む袋状で、柔軟に伸び縮みすることでガスを交換しているが、損傷すると線維化（硬化）して硬くなり、ガス交換が十分にできなくなる。それが、呼吸困難をもたらすという。肺機能の低下は、新型コロナウイルス以外が原因の重い肺炎やARDS（急性呼吸窮迫症候群）になった後にもみられています。

（AERA：アエラ '20. 9. 7 No. 39 P56～57から引用）

## 【用語説明】

サイトカイン（生理活性物質）

サイトカインは、ホルモン様の低分子タンパク質である。細胞同士の情報伝達作用を持ち、特異的な受容体に結合することで、免疫反応の増強、制御、細胞増殖、分化の調節などを行う。一つのサイトカインが別のサイトカインの産生を誘導、抑制する現象も見られ、サイトカインカスケードやサイトカインネットワークと呼ばれる。特定の内分泌組織ではなく、様々な種類の細胞によって合成されること、狭い範囲の近傍の細胞にのみ作用することがホルモンと異なる点である。

線維化（硬化）（せんいか：こうか）とは

内臓などの組織を構成している結合組織と呼ばれる部分が異常増殖する現象のこと。たとえば、心筋に線維化が生じたときには心臓の働きに異常が起き、呼吸困難や心悸亢進（動悸）などの症状が出ます。また関節リウマチにおける骨の萎縮や変性、肝臓全体の線維化を示す肝硬変の病態なども、結合組織が線維化した例としてよく知られています。

文責 県立八代工業高校定時制保健主事 境 健次